

## (研究資料紹介) ローカ・プルシャ Loka-Puruṣa —ジャイナ教の宇宙観—

濱田 淑子 本田 秋子

Items of interest from the Museum collection  
“Loka-Puruṣa, from Jaina sources”

HAMADA Shukuko HONDA Akiko

キーワード：東北福祉大学コレクション ジャイナ教 ローカ・プルシャ

## 要旨

人間の形をしたジャイナ教の宇宙像をローカ・プルシャと呼ぶ。考えうる限りの全世界と全時間を含み、世界の靈魂は上方世界、中央世界、下方世界の三界に住み分け、輪廻していると考え。最上位にあるのが完成者で上方世界は天上界である。下方には地獄界がある。中央には人間が住む円盤状の地上界がある。取り上げた資料はインド・ラジャスタン州かグジャラート付近で、17世紀に制作されたものと考えられ、木綿地に顔料で描かれた掛け絵である。しかも、他に比べて大きく絵画的であり、サンスクリット語の詳細な説明書きが付されていて、きわめて貴重で、興味深い資料といえる。

## Abstract

The diagram of Loka-Puruṣa is a representation of the triple world, in the form of cosmic man. Interestingly, the diagram depicts the immense potential, no less than the size of the cosmos, contained within man.

The ascending planes of experience are called lokas, while the descending are known as talas. In the center of these planes is the Earth-plane (madhya-loka),” shown as a circle. The complete drama of the universe is displayed here.

This wall hanging from the museum’s collection was painted on cotton in the 17<sup>th</sup> century in Gujarat or Rajasthan, India. Larger and more pictorial than others, it is a valuable and interesting artifact with detailed Sanskrit letters.

## はじめに

2004年1月20日～3月31日の会期で「開館以来15年 東北福祉大学コレクション—アイヌ アフリカ 東南アジア インド—」を開催した。当館開館以来館長を務めた芹沢長介先生が15年間に蒐集なさった品々は350点にのぼり、新たな収蔵品として東北福祉大学コレクションを形成していた。アフリカの木工品や装飾品、東南アジア、インド、日本の染織品など芹沢長介コレクションを引き継ぐものと、あらたに長介先生の眼で選びぬかれた宮城県の陶磁器、アイヌ資料、東北地方の染織品などが加わり所蔵品は厚みと深みを増していた。開館15周年という区切りの時期に開催した展覧会のポスターとチラシ(図1)の表紙に選んだのが、今回取り上げる資料であった。縦313.3cm、横195.0cmという巨大なインドの掛け絵は、東北福祉大学コレクションを代表する資料として6Fの第3展示室の壁面いっばいに紹介され観客を驚かせた。類似した資料を探した結果ジャイナ教関連のもので



図1 2004年展覧会チラシ

あることが判ったが、さらに調査を進めることを保留のまま、キャプションは「ジャイナ教のタントラ」とした。

今回の目的は、まずは資料名を確定すること、描かれた内容に少しでも近づき、資料を公にすることである。

宗教絵画研究の中でも、仏教以外のアジアの宗教絵画は日本に専門家が少ない分野である。画像を年報に公開することで、関心をもつ研究者の眼に触れて多方面からのアプローチがなされ、ジャイナ教の掛け絵の依頼主や像主をはじめ、絵を描いた目的、絵画の使用法、材質や顔料を含めた描写法、描かれた図像を読み解くことへとつなげて行きたい。

### 入手のいきさつ

入手先は東京かんかんの小川 弘氏である。小川氏は、アフリカの仮面や土器、染織品などのアフリカ関連資料を現地集め、それらを芹沢銈介に紹介して、秀逸で多彩なアフリカの造形コレクションを作りあげた功労者である。

小川氏は、2002年4月15日～7月31日に開催した展覧会「芹沢銈介コレクション アフリカ—民族の造形—」の講演会講師（演題「アフリカの仮面舞踏とその造形」）として6月8日に来館し、長介先生に、氏が私蔵しているというジャイナ教の掛け絵の話をした。帰京するとすぐにその資料が送られてきて、館長室で広げてみると、その大きさにまず驚いた。画面いっぱいに描かれた堂々たる人体と、その中の興味尽きない細密な絵に一同圧倒された。直観だったのだろう、長介先生は「これは是非所蔵品にしたい」とおっしゃって、すぐに当館で購入する事を決定した。静岡市立芹沢銈介美術館所蔵の芹沢銈介コレクションの中に、「ジャイナ教の宇宙図」（図2）と「閻浮提（えんぶだい）」（図3）がある。いずれもジャイナ教関連の絵画である。芹沢長介先生は、父が集めたこれらの存在の延長線上にある貴重な資料と考えて、当資料を所蔵品に加えようと直観的に考えたのだろう。

小川氏の元に伝来する前のことを知りたいと考え、2012年11月5日に東京都世田谷区代田1-47-1の株式会社東京かんかんを訪問した。それによると次のようないきさつがあった。

・1998年8月29日～9月10日にGallery Ueda（東京都中央区銀座6-6-7）で「COSMOS OF INDIA」展が開催され、

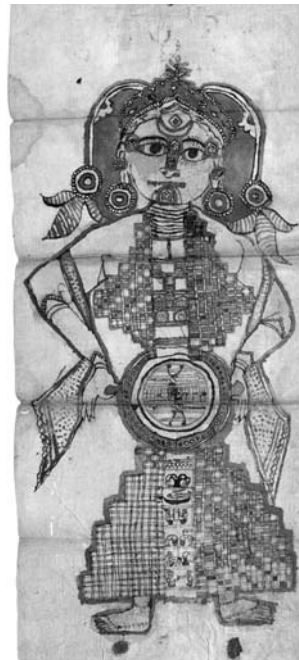


図2 「ジャイナ教の宇宙図」 静岡市立芹沢銈介美術館蔵  
55.5 × 25.5cm

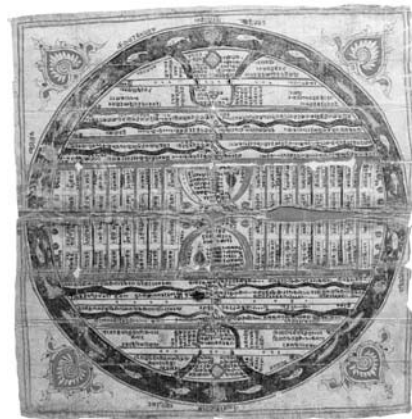


図3 「閻浮提（えんぶだい）」 静岡市立芹沢銈介美術館蔵

その時刊行された図録に当資料が掲載されていた。18点の資料が紹介されたうちのNo.3のカラー写真である。

・図録掲載の後部目録には「Painted Tantra Cotton 17C (1673) 305 × 194」とある。Galleryは直接インドのコレクターから手に入れたとのことである。

・展覧会図録を見た小川氏は、2000年に手に入れて国立民族学博物館他に話を持ちかけたが、買い手がつかないまま所蔵していたのだという。

## 資料の名称

類似資料が掲載されているものとして小川氏に提示いただいた洋書図版3点(①~③)を手がかりに、日本で出版された書籍に掲載された資料と比較検討しながら、正式名称を確定したい。

## ①「Purushakara Yantra プルシャカラ ヤントラ」

ラジャスタン州 布にグアッシュ<sup>1)</sup> 18世紀

38.1×27.9cm 個人蔵<sup>2)</sup>

同じ図像が日本で出版された下記4冊にも取り上げられていてそれぞれの題名が次のように記されている。

・Gnanesh Lalwani (構成・訳矢島道彦)「ジャイナ教の宇宙観」<sup>3)</sup> p.100に、

世界の立体構造を人体の中に配した図形、世界を内包し、果てしない非世界のなかにそびえたつ、「世界の巨人=ローカ・プルシャ」と説明する。

・フィリップ・ローソン(松山俊太郎訳)『タントラ インドエクスタシー礼賛』(イメージの博物誌8)<sup>4)</sup>に、

考えうる限りの全世界と全時間を含んだ、「人間の形をしたジャイナ教の宇宙像」としている。

・増田秀光他『ヒンドゥー教の本』<sup>5)</sup>には、「ジャイナ教の人体宇宙図」と表記。

## ②「The world (cosmic man) 世界(コズミックマン)」

グジャラート州 紙にグアッシュ 16世紀

寸法・所蔵者不詳<sup>6)</sup>

同じ図像が日本で出版された下記の本にも取り上げられている。

・定方 晟『インド宇宙論大全』<sup>7)</sup> p.349に、

ジャイナ教の宇宙観、人間の形をとる宇宙図「世界人間ローカ・プルシャ (loka-puruṣa)」と記述する。

## ③「Purushakara, the Cosmic Man Yantra プルシャカラ

コズミックマン ヤントラ」グジャラート州

紙にグアッシュ 16世紀 寸法・所蔵者不詳<sup>8)</sup>

同じ画像は次の本にも掲載されている。

・矢島道彦「ジャイナ教のマンドラ」<sup>9)</sup> p.104に、

人間の姿にたとえられる「ジャイナ教の三界宇宙図」と解説し、さらに人体の輪郭をしのぼせることから擬人的にこれを「巨人世界 (Lokapurusa)」と称すると述べている。ただしここでは制作年代を17世紀とする。

以上のように、ジャイナ教典では、宇宙全体を、足を開いて手を腰にあてて南を向いて立つ人間の形に図示する。当資料との類似資料を列記したように、その図像には様々な名称が付けられている。それらを整理して、当館所蔵資料を的確に説明する名称にしたいと考え、さらに専門家の意見を求めることとした。

まず、東北大学大学院文学研究科で仏教絵画史を専門とする泉武夫教授に相談したところ、同大学文学研究科インド学仏教史研究室でチベット、インドの図像学、曼荼羅を専門に研究する菊谷竜太氏を訪ねるよう紹介を受けた。2012年12月7日、当資料の各種の写真を持参して菊谷氏にご意見をうかがい、サンスクリット語の解説を相談した。「当資料はジャイナ教の宇宙観、ローカ・プルシャ(宇宙人間)であり、このような大がかりな絵画資料はインドでも残っていないと思う。画面に書きこまれたサンスクリット語を解説し、描かれた内容に迫るには、プロジェクトを組んで数年がかりで取り組むべきであり、それほど珍しい貴重な資料である」との評価であった。

海外の図書資料2点にみられた「プルシャカラ・ヤントラ」の名称は、人間を意味するプルシャ、図像(絵)を示すヤントラからなるもので「人体図」となり、当館資料にも適用できる。しかし、この名称は人間には「微細身」という霊的身体があると考えられるヒンドゥー教の宇宙観を表わすものであり、ジャイナ教の宇宙観を図示する図像に限定して使われる名称ではない。宇宙は巨大な人間の形をしていて、そのなかに考えうる限りの全世界と全時間をすべて含んでいるとするジャイナ教の独特な宇宙観を図示する“世界の巨人”「ローカ・プルシャ Loka-Puruṣa」と呼ぶことが適当であると考えた。

## ジャイナ教の宇宙観

### 「ローカ・プルシャ Loka-Puruṣa」概要

#### ・材質形状と寸法

木綿地 着色(手描き) 313.3×195.0cm

65、67、64cm巾の木綿布を三枚接いで使用しているが、その木綿布は1mm<sup>2</sup>の中に経、緯2本ずつの太い木綿糸が整然と並び密に織られている。

裏打ちにはざっくりした粗い木綿地がついているが、この裏打ちがどこでいつの時点で付けられたかは定かでない。

輪郭線や文字は黒、鼠色、その他に使われている色彩は、朱(橙)、肌色、紫、赤紫、海老茶、茶色、黄土、黄色、うす藍、群青、緑青、胡粉の12色が確認できる。特に目立つ色彩は赤系統と黄色である。

木綿地の上に、主に鉱物性のものを砕いて作った顔料と植物染料の藍で描かれ、彩度の高い朱などの赤系の色は、カイガラムシの分泌物を集めて作ったラック(lac)を使って、絵画が描かれている。畠中光享によれば<sup>10)</sup>、ペオリ(peori)と呼ぶ黄色はインド以外にはない黄色で、褪色や変色しないところからIndian Imperial Yellowといわれ、ヨーロッパにも輸出されたほど高価な絵具なのだという。また、絵具を布に密着させる接着剤は、膠(にかわ)やマメ科植物の樹脂が使われたそうだ。黒は煤(すす)や炭から作ったが、上等の黒はアイボリー・ブラックと呼び、象牙を焼いて作られたものもあったようだ<sup>11)</sup>。鉄線描<sup>12)</sup>を思わせる硬質な輪郭線は、描き起こしの技法で描かれている。

人間の形の胸にあたる上方世界には、定規を使用して線を引いた形跡もみられ、硬筆のペンを使用して描いているのが特徴といえる<sup>13)</sup>。

#### ・描かれた内容

ジャイナ教、仏教、ヒンドゥー教宇宙観の共通点として宇宙の中心にメール山(Meru 須弥山)があり、いくつもの大陸がメール山を環状にとりまき、大陸と大陸を海が隔て、地下には地獄が層をなし、地の上には聖者や神の世界が層をなしているという考え方がある。その大きな違いは、ヒンドゥー教では宇宙はブラフマー・ヴィシュヌ・シヴァの三大神による創造、破壊、再生のプロセスにあるというのに対し

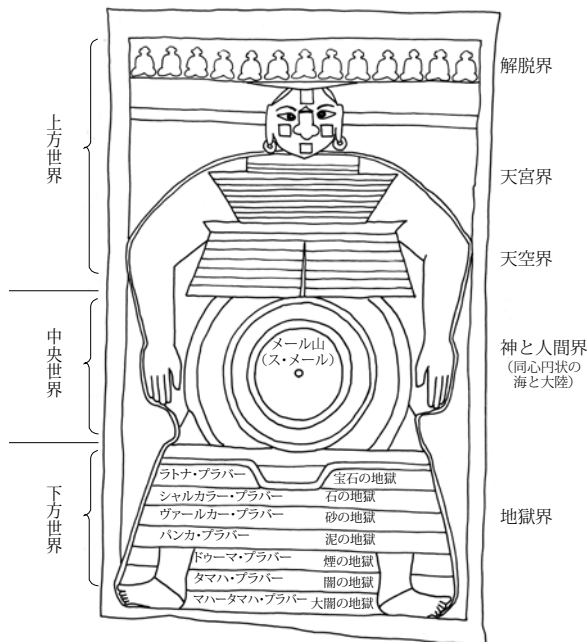


図4 ジャイナ教の宇宙観 ローカ・プルシャ

て、仏教や、ジャイナ教は創造神を認めない<sup>7)</sup>。

特にジャイナ教では、宇宙は生滅することなく永遠不変のものであると考える。宇宙創造説をとらず、宇宙の構成要素と形態、構造を説く独特の宇宙論を展開し、それを克明に図式化する。その図像がローカ・プルシャである(図4)。世界には種々多数の靈魂がそれぞれの状態に応じて、上方世界(urdhva-loka ウールドヴァ・ロカ 解脱界、天宮界、天空界)(図5-A・B)、中央世界(madhya-loka マディア・ロカ 人間界)、下方世界(urdhva-loka アド・ロカ 地獄界)(図6-



図5-A 上方世界

A・B)の三界に住み分け、輪廻転生していると説く。最終的には輪廻から解き放たれること、すなわち解脱を希求する。解脱した最上位にあるのが完成者で、三日月のように描かれた解脱界 (siddha-loka) (図5-A) に描かれる。その下にはカルパ神が層になって住み分ける天宮界 (図5-B) がくる。腰にあたる部分は人間などが住む円盤状の中央世界で、中心にはメール山が5つ並んでいる。その下方には図示したように、上から宝石、石、砂、泥、煙、闇、大闇の7層の地獄があり、下へ行くほど暗黒の恐怖の度合いが増す (図4)。



図5-B 上方世界

#### ・中央世界を読み解く (図7・8)

ローカ・プルシャの腰部にあたるのが中央世界である。図示されるのは胴を輪切りにした円盤形である。しかも上から見た図を立てた形にして見せている。図示したように中央世界の中心に並ぶメール山は、東からマンダラ山、ヴィジャーヤ山、アカラ山、ヴィデユン・マリーン山である (図7)。中央世界の中心部分にある円形がジャンブー大陸 (Jambūdvīpa 閻浮提えんぶだい)。その外側を同心円状に海と国 (洲) が取り巻いている。ジャンブー大陸の中央にある三重の円がメール山 (Meru) の中で一番高いスダルシャナで、尊称をつけてスメール山 (須弥山) と呼んでいる。南北には6つの地方に、9つの山地と13の河が流れている。

ジャンブー大陸の外側には藍色の環状の塩水を意味するラヴァナ海があり、次にこの大陸に多く茂る樹木の名であるダータキーカンダ大陸、黒い水を意味するカーローダ海、プシュカラ大陸と続く。人間は、ジャンブー、ダータキーカンダ、プシュカラの三大陸にしか住むことができないのだという。大陸を区切る藍色の環状の海には魚や亀が泳いでいるのが見える。プシュカラは「蓮」を意味し、外側を囲む蓮弁は蓮華のテラスを表すのだという<sup>7)</sup>。



図6-A 下方世界 (地獄の入口)

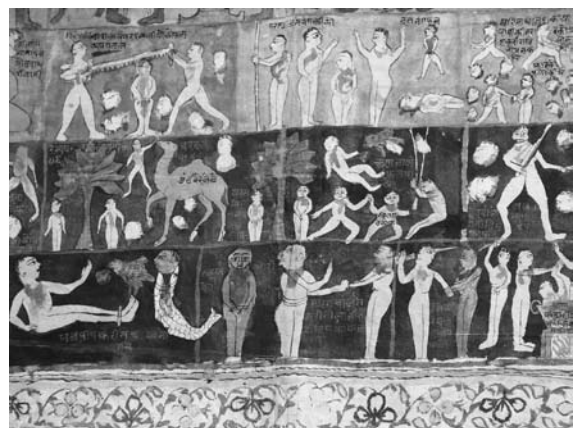


図6-B 下方世界 (地獄)

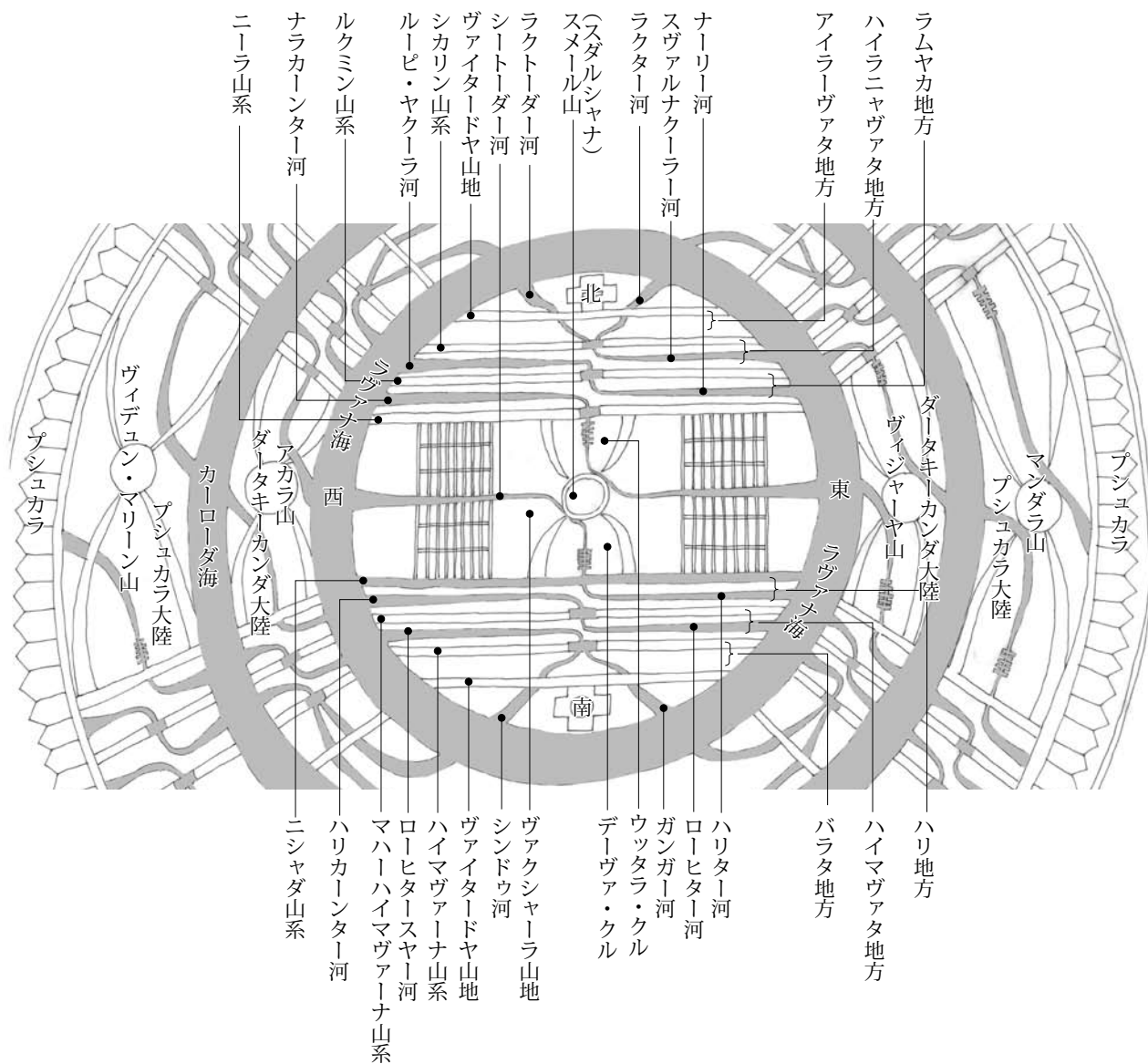


図7 中央世界  
 ※図4、図7は註3)、7)、9)を参考に作成した。

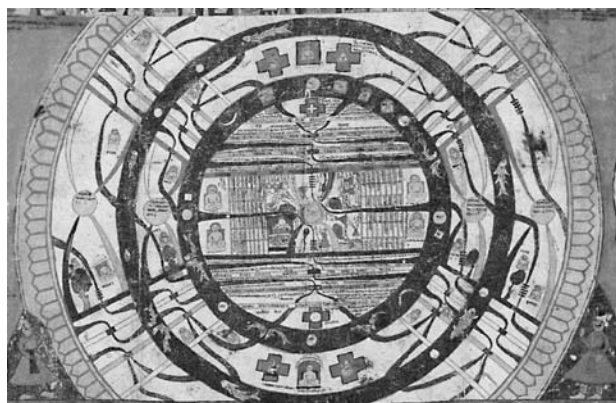


図8 中央世界

## 終わりに

### ・ジャイナ教の絵画

インドの伝統思想といえば、バラモン教とヒンドゥー教である。紀元前15世紀頃、インド北西部に侵入したアーリア人の宗教であるヴェーダ教から発展したバラモン教は、紀元前3世紀ごろから土着の神々を交えたヒンドゥー教に姿を変え、4世紀以後のグプタ朝時代に黄金期を迎えたという。これに対し、「新興自由思想」として紀元前4、5世紀、西北インドに仏教とジャイナ教が誕生した。ジャイナ教はインド・ビハール州マガダ地方に興った。ニガンタ・ナータプッタ(本名ヴァルダマーナ 大悟してジナとなり、マハーヴィーラと尊称される)を開祖としている<sup>3)</sup>。仏教はヒンドゥー教化して密教を生み、13世紀にインドから消えてしまったが、ジャイナ教は今日も西インドを中心に250万あまりの信徒を有し存続し続けているという。

インドの絵画というとミニアチュール絵画(細密画)が有名である。11世紀～13世紀初めにシュロヤシの葉(貝葉)に描かれた仏教経典挿絵が最初であるとされ、その後はジャイナ教や一部のヒンドゥー教経典挿絵として描かれた。そして15、16世紀になるとジャイナ教の特徴的な経典挿絵が数多く作られ、そのモチーフの多くはジャイナ教宇宙観図やジャイナ経典「カルパストラ」(開祖・マハーヴィーラの生涯の出来後や師の像、天国や地獄に関するもの)が描かれたという<sup>13)</sup>。当館所蔵の「ローカ・プルシャ Loka-purusa」の左右肩部分の「象に乗る人物図」(図9)、指先の左右に描かれた世俗画(図10)は明らかにインドミニアチュール絵画様式を示している。そしてインドでは眼を大切に扱い、大きく描くというが、ここでも人物の眼は同じく大きい。

ジャンプー大陸の中央にはメール山がそびえている。メール山はインド人の記す世界にしばしば登場する。ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教の宇宙観の共通点は、メール山を宇宙の中心・宇宙軸ととらえることである<sup>7)</sup>。仏教の宇宙観で、宇宙の中心にそびえ立つ強大な宇宙山を須弥山(しゅみせん)と呼ぶが、サンスクリット語のスメールに由来する名称である<sup>15)</sup>。インドで生れた聖山信仰「メール山」が須弥山となり、仏教、ヒンドゥー教の伝播を通じてアジアの各地に伝わった。そして須弥山中腹には日天と月天が回っている。須弥山は中

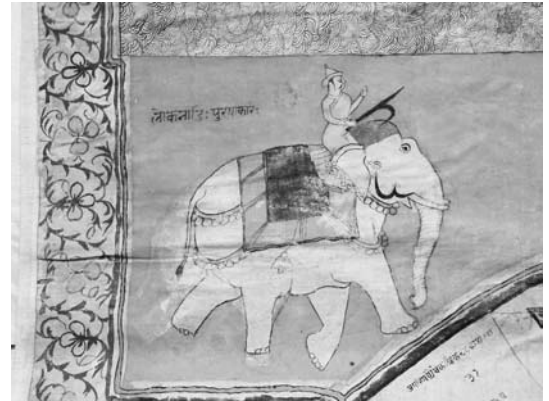


図9 象に乗る人物図



図10 指先の左右に描かれた世俗図

国の崑崙山(こんろんさん)<sup>16)</sup>、蓬萊山(ほうらいさん 三神山)<sup>17)</sup>、朝鮮半島の金剛山、そして日本の富士山信仰までつながるのだという。

富士山信仰と言えば、狩野元信筆の「富士参詣曼荼羅」が思い浮かぶ。富士山頂に阿弥陀、薬師、菩薩が座し、山の中腹を日月がめぐり、下方には浅間神社と参詣風景を描く神仏

混交の垂迹曼荼羅である。さらに吉野、熊野、白山、立山などの修験道の霊山では、山岳曼荼羅図、参詣曼荼羅図が作られた。富山県の霊峰立山にまつわる「立山曼荼羅」には、血の池、賽の河原などの地獄の場面を描く。地獄谷で施餓鬼法要や血盆経供養が営まれると、生前犯した罪障が消され、地獄の苦から救われて浄土に迎えられるという信仰があり、これらの絵画は、「絵解き」の対象となったことも知られている。「絵解き」とは教理や經典に基づき絵の内容や思想を解説する事だが、こうした「絵解き」は、「インドに起こり、中央アジアの各地や中国、朝鮮半島に伝来し、やがて日本にも流伝、さらに独自の展開をした」といわれている<sup>18)</sup>。中でも、寺社への参詣を盛んにしようとの願いを込めて制作された参詣曼荼羅は、大勢の人々を集めての「絵解き」を考えてか、俯瞰図的要素多く取り込んだ大画面の掛け絵（掛幅絵）形式をとっている。しかも主に泥絵具を使用していて、素朴で親しみやすい描法がジャイナ教掛け絵に通じるものである。寺社の勧進に携わる人々は、この掛け絵を持って全国を廻ったらしい。こうした日本の参詣曼荼羅の例は、ジャイナ教の大きな掛け絵のインドでの使用法を考えるヒントになるのではないだろうか。

取り上げた所蔵資料は大きいだけでなく、描かれた内容にもサンスクリット語による詳細な説明がついている、ジャイナ教の宇宙観を特に丁寧に図示した貴重な資料である。これらのサンスクリット語を解読できれば、なぜこのように大きな図を描いたのか、また描かせた施主はどのような人物なのか、そしてどのように使用されたものなのかも明らかになるだろう。さらに残念だったのは、当資料が最初に公開された Gallery Ueda の「COSMOS OF INDIA」図録の目録にあった「1673年」の記述の根拠となる文字を、確認できなかったこと、サンスクリット語解読に及ばなかったことである。今後は専門家のご教示を得て、サンスクリット語の解読を進めることが何よりの課題である。

## 付記

ご所蔵作品の図版掲載についてご快諾いただいた静岡市立芹沢銈介美術館、資料に関しての情報をいただいた東京かんかんの小川弘氏、また専門の立場からご教示頂いた東北大学大学院文学研究科（インド学仏教史研究室）の菊谷竜太氏に

感謝申し上げます。英文要旨については東北福祉大学の Ken Schmidt 准教授にご協力いただきました。感謝申し上げます。

## 註

- 1) グアッシュ gouache：顔料にアラビアゴム・蜜などをまぜて練ったもの、これを用いた絵。（『大辞林』1988 三省堂）
- 2) Ravi Kumar 『TANTRA ART』 New Delhi 1971 p.76 に図版掲載
- 3) 岩田慶治・杉浦康平 『アジアの宇宙観』1989 講談社
- 4) フィリップ・ローソン（松山俊太郎訳）『タントラ インドのエクスタシー礼賛』（イメージの博物誌8）1978 平凡社 p.34
- 5) 増田秀光他 『ヒンドゥー教の本』1995 学研パブリッシング p.82
- 6) Ravi Kumar 『THE JAIN COSMOLOGY』1981 Basilius press, Suisse Kumar Gallery, New Delhi-India p.53
- 7) 定方 晟 『インド宇宙論大全』2011 春秋社
- 8) Ajit Mookerjee・MadhuKhanna 『The Tantric Way, Art・Science・Ritual』1977 Tahmes and Hudson Ltd, London p.71
- 9) 立川武蔵編 『マンダラ宇宙論』1996 法蔵館
- 10) 畠中光享 「インドミニチュア絵画」（新潟市新津美術館・三鷹市美術ギャラリー 『畠中光享コレクション 華麗なるインドーインド細密画と染織の美ー』図録 2012 pp.17～21 所収）
- 11) 山田 和 『インドミニチュア幻想』文春文庫 2009 pp.154～55
- 12) 鉄線描とは、「遊糸描の如く連続と続いているが、ピアノ線のように勁直（けいちよく）さのある鋭い描線」（野間清六他 『日本美術辞典』1952 東京堂出版）
- 13) 畠中光享 「初期ミニチュア絵画」（10. p.20～21 所収）
- 14) Ganesh Lalwani・矢島道彦（訳）「ジャイナ教の宇宙観」 pp.94～111（3. 所収）
- 15) 杉浦康平 「玉虫厨子。宇宙樹が宇宙山「須弥山」となる」（杉浦康平 『生命の樹・花宇宙』 pp.190～193 NHK 出版 2000）
- 16) 古代中国の神話伝説上の山。天への通路として信仰を集めた。中国の西方にあり、西王母のすみかとされた。（金沢篤 「アジアの宇宙観用語集」（3） pp.375～408 参考）
- 17) 中国の伝説に伝えられる渤海の中にあり、不死の霊薬を蔵した宮殿があり、神仙が住むといわれた。（同上参考）
- 18) 林雅彦 「絵解きと参詣曼荼羅」（下坂 守 『日本の美術 No.331 参詣曼荼羅』 pp.85～96 1993 至文堂）